

どんな危険がひそんでいるか

シートNo.3-(5)ロッカー運搬



状 況

あなたは、ロッカーを傾け、同僚がおさえている台車に載せようとしています。

どんな危険がひそんでいるか

シートNo.4-(1)ダンボール箱開梱



状 況

あなたは、カッターナイフを使ってダンボール箱を開梱しています。

どんな危険がひそんでいるか

シートNo.4-(2)蛍光灯交換



状 況

あなたは、廊下の蛍光灯を交換しています。

どんな危険がひそんでいるか

シートNo.4-(3)容器入れ替え



状 況

あなたは、180缶に入っている洗剤を別の容器に入れ替えています。

8 K Y T手法の活用

1 ヒヤリ・ハットの活用方法

ヒヤリ・ハットとは、災害にはならなかったが、ヒヤリとした、ハットしたという事故で、職場の危険が顕在化したものです。この体験は職場のみんなで共有し対策することで、同じ要因から発生する災害を未然に防止できるとても貴重な情報です。

(1) 一人のヒヤリは全員で共有しよう

誰しも、何がしかのヒヤリの体験があるはずです。職場で体験したヒヤリは、恥ずかしがらずにドンドン出し、みんなで共有して、同じヒヤリ・ハットを繰り返さないようにしましょう。

ヒヤリ体験をしたらメモ用紙（ヒヤリ・ハット用紙）にすぐ記入し、朝礼や終礼で紹介したり、上司に報告したりして情報を共有します。

また業務中にこんな危険もあるよねと想定されるヒヤリ（想定ヒヤリ）も安全を先取りする上で有効です。

簡単な業務のイラストがあると状況がよく分かり話が進みます。

(2) 職場の問題は職場で解決しよう

ヒヤリ・ハットは、職場で直ぐに解決するのが原則です。ヒヤリ・ハットが出てくるようになったら、重要なものはK Y Tの手法を活用し、さらに確実な対策を立てるようにしましょう。

情報を共有し、みんなの話し合いで

「施設利用者の予期せぬ突発的な行動に対する安全活動・手法はないか？」という声があります。

これは、利用者に対策を求めることはできません。となると、職員自らが相手の行動を予知・予測して行動することが大事です。それには、日頃から職員間の情報交換を密にして利用者の行動特性を把握しておくことが重要です。

このことが、まさに“K Y活動”といえます。

そして、これらいくつかの事例（ケース）について、職場で話し合った内容を残し、積み上げていけば貴重なノウハウとして活用できると思います。

この予期せぬ突発行動に対するK Yを仕上げることも社会福祉施設における安全活動の課題と思います。

まず比較的簡単な事例をテーマに「K Y T基礎4 R法」で話し合い、「職員行動づくり」を行います。その作成過程で良いアイデアが出てくるはずですが、机上ではなく、実践活動の中で改善が生まれるのが“K Y活動”です。

ヒヤリ・ハットメモ（参考例）

ヒヤリ・ハット メモ			ヒヤリ・ハットKYT	
年月日	職場名	氏名	ヒヤリ・イラスト	
いつ				
どこで				
何が			1 R	(どんな危険がひそんでいるか)
どうした			2 R	(危険のポイント)
			3 R	(あなたならどうする)
			4 R	(チーム行動目標)
			指差し呼称項目	

2 交通ヒヤリマップでゼロ災運転

交通事故災害の発生は、社会問題となっており、平成 20 年の警察庁交通局統計によると、発生件数は年間 76 万 6,147 件、死亡事故は年間 5,025 件、負傷者数は減少傾向にあるものの、年間 94 万 5,504 人と今なお高い数値を示しています。

交通事故原因の大部分がヒューマンエラーに起因するものと言われています。

交通事故防止については、交通KY活動の中で、チームミーティングを中心に、交通KYT基礎4ラウンド法や指差し呼称や交通ヒヤリマップ活動等の手法がありますが、社会福祉施設の交通安全の確保を考えた場合、車の送迎ルートが限定されていることから、交通ヒヤリマップの作成と活用について提案をします。

(1) 車の運転の特徴

車の運転には、他の一般作業には見られない幾つの特徴があります。

① 車の運転は1人作業です。

一般的な業務では、組織や管理監督者の目がありますが、車の運転は組織や職場のメンバーの目も届きません。運転者一人ひとりの行動と責任において行われています。

② 周囲の状況が常に変化します。

一般的な業務の場合、非定常作業を除いて大半が繰り返し行うものです。

しかしながら車の運転は、同じ道路であっても季節や気象状況、時間帯などで様々な変化があります。このため、様々な危険とその対策を頭に入れることが必要です。

③ 対策を相手に求めることはできません。

運手者は、たとえ自分は法規に則った運転をしていたとしても、急に歩行者が飛び出してきたり、前の車が急ブレーキをかけたりした時、相手に対策を求められません。

このため、運転者は予めそれらの事態（相手）に対応できるような運転行動を取るとともに、それらの事態が生じた場合にはそれらに対応する的確な判断と事故を回避するための運転行動をしなければなりません。

(2) 交通ヒヤリマップとは

施設の送迎用車両のルートや時間帯は、大体決まっていると思います。迎えと送りでは違いはあると思いますが、このルートないしエリア中で、運転者が体験した交通ヒヤリ・ハットをみんなで出し合い、マップに書出し、それを共有して安全運転に結びつける手法です。

一般的には、運行経路に沿って、白地図に過去の事故やみんなのヒヤリ体験を書き込んだ地図になります。種類によっては、駐車地点、連絡先、避難先なども書き込み業務メモにも使えます。

(3) 交通ヒヤリは貴重な情報

交通事故の原因はいろいろありますが、最も大きな原因一つに、ちょっとした不注意や運転技能に対する過信です。

人身事故となるような大きな事故も、ほんのかすった程度の小さな事故も紙一重に過ぎないのです。そして事故にならなかったもののヒヤリとしたことは誰でも1回や2回、体験しているのではないのでしょうか。その1人ひとりの貴重な体験をヒヤリ情報としてみんなの安全の先取りのために活用すれば、交通安全対策はもっと身近になり交通事故ゼロに大きく貢献するものと思います。

交通ヒヤリマップの効果は大きく分けて3つあります。

第1は、交通ヒヤリマップを作ることによって危険に対する感受性を鋭くします。

第2は、ミーティングでヒヤリ・ハットについて話合うことにより、それまで1人ひとりのものでしかなかった危険情報が共有できることです。

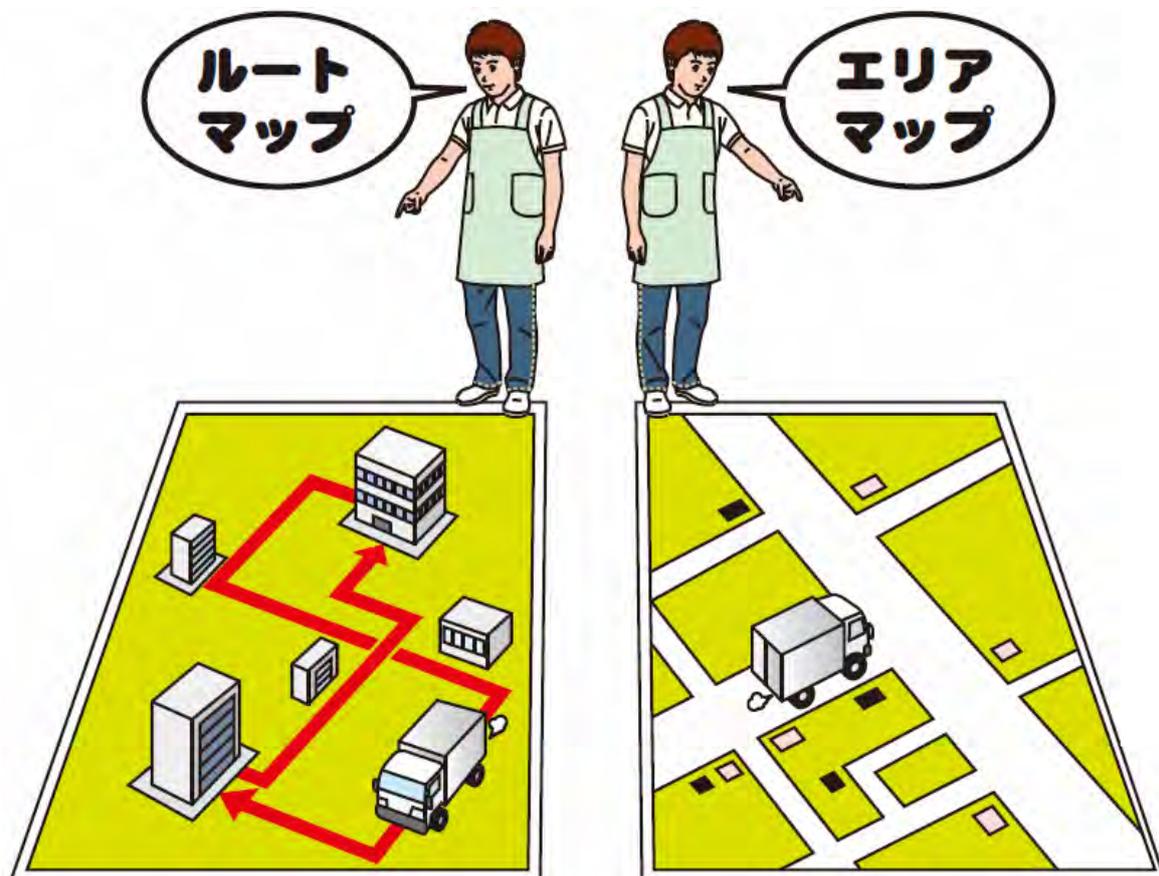
第3は、その結果、運転者1人ひとり、適切な判断と運転行動ができるということです。

(4) 交通ヒヤリマップの作り方

① ルートマップとエリアマップ

交通ヒヤリマップにはその目的によってルートマップとエリアマップの2つがあります。ルートマップは、決まったルートに沿って巡回する目的で作成するもの、エリアマップは運行する地域がある程度決まっている場合に作成するものです。

この2つのうちそれぞれの業務に合ったヒヤリマップを作成し、活用しましょう。一人ひとりのヒヤリ・ハット情報を、みんなで共有し、ゼロ災運転に大いに役立てて下さい。



② 作成手順（ルートマップの場合）

ルート図は、業務用の順路図があればそれを使ってよいし、白地図上にルートを示す線を引いても良いでしょう。また、概略図を書き、進行経路は太い線で表して、信号などの記号を記入するなどして、自作しても構いません。（図 3-8-1）

地図が用意できたら、会社からルートに沿ってみんなでヒヤリ箇所や事故発生箇所を出し合っていきます。

ア ヒヤリ箇所に×印をつけ、ヒヤリの内容をラベルに書きます。事故発生箇所には⊗印をつけるとわかりやすいです。

イ 全部出そろったら、ラベルにNo.をつけ地図の余白に貼っていきます。

ウ No.順に皆で話し合いながら、ヒヤリの要点の下に、対策は青で、指差し呼称項目は赤で記入します。

記号を入れて分かりやすく

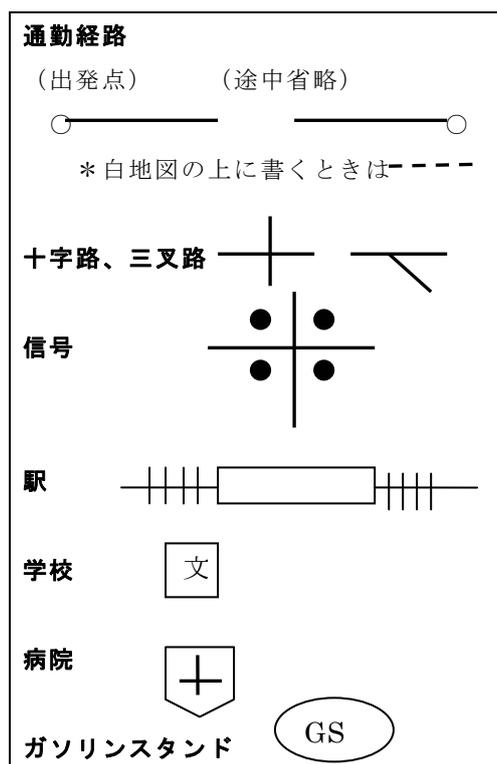


図 3-8-1 地図記号の例

③ 交通ヒヤリマップを見直す

これで、交通ヒヤリマップが一応出来上がりました。でも、これで完成したわけではありません。道路工事や天候などによって変わってしまう交通状況、また、新たなヒヤリ体験も発生します。

そこで、3カ月ごと、季節の変わり目ごとに見直して書き直すことにより、ヒヤリマップを生きた、そして効果のあるものにすることができます。



④ 交通ヒヤリマップの活かし方

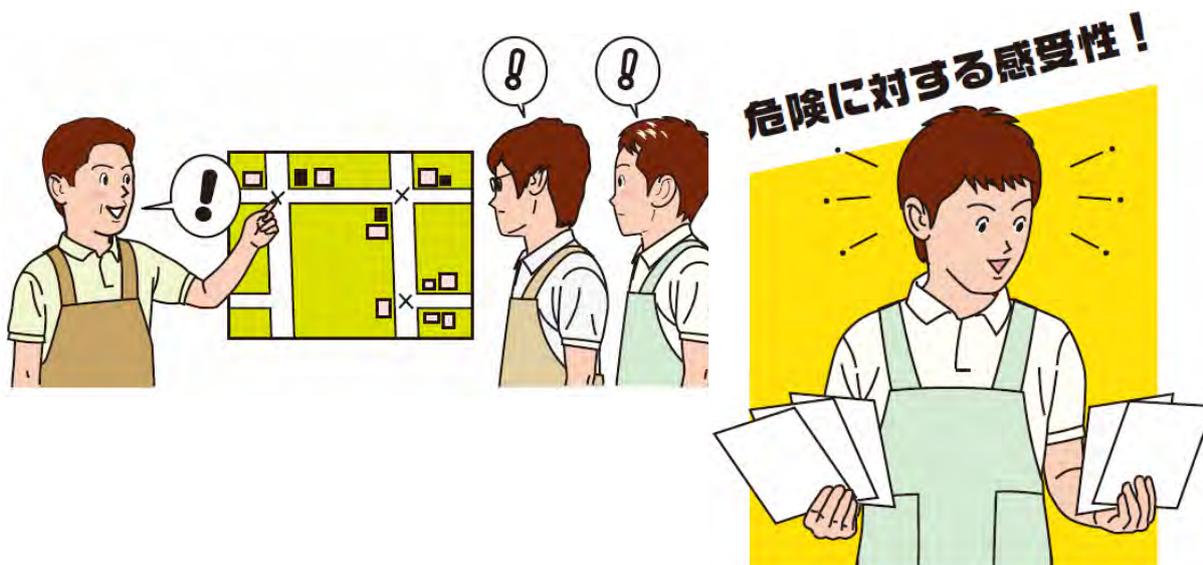
ア 管理監督者の活用

朝のミーティングの時など、管理者、監督者あるいはグループのリーダーが、その日の業務内容について説明や指示を行うときに、交通ヒヤリマップを利用した業務指示をしましょう。

業務指示は、現地での業務内容について指示するだけでなく、行き帰りの運転についても、的確な指示が必要です。ただ、「運転に気をつけて」だけでなく、交通ヒヤリマップを取り出し、どこが危険か？対策は？と、ポイントを示して行うのです。もちろん、メンバーから意見を求めることも忘れてはなりません。そして、危険のポイントに対する指差し呼称項目をみんなで唱和確認しましょう。

イ 交通ヒヤリKYT

ヒヤリマップ上に×印のついた箇所について、イラストシートを作り、短時間KYTを行って、危険に対する感受性を研ぎすましましょう。



送迎車交通ヒヤリマップ（参考例）

経路 園→D→B→A→C→園

シートベルトは利用者にも
必ず着用させよう ヨシ！

